

みます。すべてのセンテンスが終了すると、合計得点と評価（A+～F）が表示されます。学習が終了したクリップは、学習履歴へ記録されます。1つのビデオクリップは約1分程度で、ビデオ学習にかかる時間は約10分～15分ほどです。

3. 既知語の知識を生かそう

筆者は以前から、受講生の皆さんは、比較的沢山の単語の知識があるにも拘わらず、正確に発音できない単語が多いこと、そして音読が苦手であることに問題を感じていました。単語と音声結びつかなければ、スピーキング、リスニングに支障をきたします。特にリスニングは、1つ1つの単語の発音の正確さに加えて、2つ以上の単語の組み合わせによって起きる、音の融合や連結などの現象や、あるいは日本語にはない英語独特のリズムや強勢などを理解し、慣れておくことが大切です。

話を戻しますが、担当科目の受講生の皆さんには、毎学期始めと終わりに語彙サイズを測るテストを行っています。テストの結果から、多くの受講生の皆さんが、自律的な英語学習者に必要とされている最初の閾（いき）値をクリアしている、またはそれに近いレベルであることが示されています。苦勞して覚えた単語を、実際に使えなければ勿体ないと思いませんか。既知語（知っている単語）を使って、自分の好きなアーティストのインタビューや、映画のセリフなどを声に出しながら、自然に無理なく英語独特の発音やアクセント、音のつながりやリズムに慣れ、自分のものにしてみてはいかがでしょうか。その過程で遭遇する知らない単語は、その都度覚えていけばよいのです。

4. むすび

英語学習を取り巻く環境は、情報機器やメディアの発展により、驚くほど進歩し、変化しています。それに伴い、映像メディアを使った英語の指導に関する実践や研究も盛んに行われています。今までは、英語に興味を持てなかった学習者の皆さんに、そして、英語をもっと勉強したいと思っている皆さんにとって魅力的な英語の学習方法や教材は、きっと沢山あると思います。授業内外で学習者の皆さんが、英語と心地よく付き合える方法（個々人に合った学習方法）を見つけ、それによって自律的・継続的に目標へと向かっていける

ようサポートすることもまた、英語の教員にとって重要な役割の一つであろうと思っています。TOEICのような即戦力的で、テストの結果（点数）ばかりが重視される時代ではありますが、興味の赴くまま知識の世界を広げ、深めていく、そのプロセスを楽しみながら、自分の学びのスタイルを確立していく作業もまた大学時代には大切なことのように思います。なお、追記になりますが、上述した『スティーブ・ジョブズの印象に残る瞬間』の中で、ジョブズ氏がスタンフォード大学の卒業式で行ったスピーチの全文と動画が、スタンフォード大学のサイト <http://news.stanford.edu/news/2005/june15/jobs-061505.html/> に掲載されています。また、英語と日本語字幕付き動画は <http://sago.livedoor.biz/archives/50251034.html> などで視聴することができます。ジョブズ氏のスピーチには、やがては社会へとばばたく大学生の皆さんにとって腹に落ちる言葉が散りばめられていると思います。是非視聴して下さい。

D.H. ロレンス作 『処女とジプシー』に登場 する黒い男

経営学部
山田 晶子

文化的生活（既知の世界）と非文化的生活（未知の世界）の対立は、ロレンスの多くの作品の中心テーマである。彼は、世界各地を回り、ついにニューメキシコへ至る。そこで白人文明に汚染されていないニューメキシコの砂漠の偉大な美、誇り高い純粋さに感動した。赤色インディアンの踊りは宗教的なものであり、大地へ吸い込まれるような印象を与えた。ロレンスの、表面の下へ行きたいという願いを彼らは成就しているのであり、それにより強さ、力、精力を与える偉大な宇宙の生命力の根源と接触しているのである。ロレンス

は、ニューメキシコで出会ったインディアンとの出会いを通じて自らの文学のテーマを深め、発展させることができた。彼の作品の中で非文化的な生活をしているのは、文化圏の周辺で暮らす人々であり、身分が賤しかったり、放浪したりしている人間である。本稿では、このような非文化圏で生きている「黒い男」を、後期中編小説である『処女とジプシー』（1930）から見てみたい。

『処女とジプシー』の主人公は、イベットという若い未婚の女性であり、牧師館で「おふくろさま」と呼ばれる祖母に育てられている。この祖母は石のように無情で何かを隠している仮面のようなものである、と述べられており、イギリスの因習的なキリスト教に束縛された社会を象徴していると考えられる。汚れていないイベットがいかにしてこの牧師館から逃れることができるのか、ということが作品のテーマである。彼女を救ってくれることになったのは、ジプシーの男であった。「おふくろさま」のしつこい干渉を振り切って、友達とドライブに出かけたイベットは、山頂の石切り場でジプシーに出会うが、ジプシーはロレンス的な肯定される人物として登場している。彼は山下にある俗界を超越したような人間で、美しく威厳があり高貴である。彼は「黒」のイメージを備えている。黒いズボン、黒い靴を履き、黒っぽい緑色の帽子をかぶり、黒い髪、黒い目、黒い手としなやかな足を持っている。そして法の下に生きる人間を冷笑する無法者の、大胆で誇り高い眼差しをしている。黒い皮膚をしていることから、彼が南方の人間の血筋を引く者であることが分かる。このことが牧師館の冷たい不毛性と対比されて、彼は温かな生命力を持った人間であることを暗示している。イベットはジプシーの男を見て心を惹かれる。彼が人生について自分と同じ見方をしており、自分より強いただ一人の人間であることを感じる。彼は彼女の心の琴線、核に触れたのである。ジプシーの男は、牧師館の固い石に象徴される頑固な人々とは正反対で、柔らかさ、純粹さ、しなやかさが強調されており、生命力を帯びている。

ジプシーの男に出会って以来、イベットの心は意識と無意識の状態に分裂し、階段の踊り場から常に窓の外を眺めて何かを待ち受けるようになり、ジプシーの男が時々彼女の意識へ上ってくる。彼がだんだんと彼女の心に根を下ろしていく様子

は、彼女が、自分は周囲の人間とは異なった存在であると気づいていく過程に示されている。二回目に会ったとき、ジプシーの男の視線は、彼女がこれまでに見られたことがないような、彼女の女としての核を射るようなものであり、反対に他の白い人間は彼女の表面しか見ず、彼女の「女」の本質を決して見ることはできないと思われる。しかしジプシーの男は彼女にそれを目覚めさせる力を持っているのである。白い男と黒い男の対比において、白は本来の清浄さの意味を失って汚れており、反対に黒は清らかな意味を持っているのである。

ジプシーの男とイベットの関係の真実性は、彼が彼女を「欲望した」（“desired”）という表現で述べられているが、この欲望はイベットには真に素晴らしいものと感じられる。その欲望を感じることができる者は王であり、真の自己を知った人間なのである。イベットはジプシーの男の欲望を感じた時、今までとは全く異なった感じを抱く。常識と「異質」になることが救われるためには必要なのである。

この頃イベットには牧師館での生活が死ぬほど退屈で、無気力な状態に陥る。まさしく生きながら死んでいるかのように。だがその時、降り続いた雨とトンネル事故のためにダムが決壊し、庭に出ていたイベットを目がけてパブル川の水がライオンのように襲ってくる。すると洪水と同時にジプシーの男が彼女を助けに現われ、洪水は彼女を滅ぼすためではなく救うために来たのであり、ジプシーの男がその使いであったことが分かる。洪水は牧師館の中に一人だけ残っていた「おふくろさま」を溺死させ、ジプシーの男はイベットを救出する。すべてのものをむさぼりなぎ倒す洪水は3メートル以上の深さがあると思われ、まるで海のような光景である。それは「この世の終わりの夜」と描かれているようにノアの洪水を思わせる。ジプシーの男とイベットはノアの箱舟の中にいるかのように、何とか倒れないで残っている牧師館の屋根裏部屋へと逃れて、二人とも裸になって体を温め合うのである。ジプシーの男はその身体の熱によってイベットの肉体をよみがえらせたのであるが、同時に彼女の魂をもよみがえらせたのである。彼は怒りの洪水の海となって彼女を死の館から救ったのである。洪水がライオンのイメージ

を帯びていることと、ジプシーの目がトラの目のように燃えていることが、両者の共通性を表している。水のイメージには正負両方の意味があり、洪水が浄化の象徴として正の意味を持つ一方で、降り続いた雨は「悲しみ」の象徴として負の意味を持っている。イベットが助かったのは初春であり、大自然の中で新しい生命が芽吹く時イベットも再生するのである。

★★★★★の洋書(2)

不運？ 不器用？ 滑稽？

～読者を引き込むルイス・サッকারの本～

法学部

小坂 敦子

ルイス・サッカー (Louis Sachar) はアメリカでは子どもたちに大人気の作家の一人で、私も楽しく20冊ぐらい読みました。今回は、その中から私にとっての「とっておき」を中心に紹介します。

ルイス・サッカーの本は、9～12歳向けのものが多いので、洋書を読み始めて間もない人にも、自分の好みに合った本が選べれば¹、楽しく読破するのにそれほどハードルは高くはないと思います。また、大きめの活字で80ページ程度の短編から、細かい活字で200ページを超すようなものまで、長さもいろいろありますので、英語を読むことにどの程度慣れているのかという点からも、幅をもって選択できます。

子どもたちに人気のある理由を私なりに考えてみました。まずはユーモアたっぷり、軽妙洒脱。ちょっとありえないというか極端だと思える場面もあります。登場人物は必死なのですが、一生懸命さの裏返しで、傍から見ると滑稽に見えたりする、そんな視点を味わえるときもあります。

ルイス・サッカーの本をアマゾンで検索しているときに、*Johnny's in the Basement*² という本のカスタマー・レビューの中に「SACHAR 得意の “ち

よっと不運な男の子” が恋をし、友情を深めながら少しずつ成長していく姿がよく描かれています³ という文を見つけました。

「ちょっと不運な男の子」、と読んで、「そうか、そういう見方もあるのだな」と思いました。私自身は、「不運」というよりは、「不器用な」男の子を描くのがとても上手だと感じていたからです。

ルイス・サッカーの著作の中で、私が好きな本には共通点があります。それは、「不運」にせよ「不器用」にせよ、決して理想的とは思えない状況の中で、決して完璧でない主人公が、弱さを持ちながらも健気に生きていこうとすることです。その道は、順風満帆ではないので、私はすっかり応援モードになって、ドキドキ・ハラハラしながら引き込まれてしまいます。そして、あっと言う間に最後のページが近づいてきて、「もう少し読んでいたいなあ」と思いつつ、最後の20～30ページは思わずゆっくり味わって読んでしまいます。特に次の3冊がそうでした。

*Super Fast, Out of Control!*⁴

*Small Steps*⁵

*Dogs Don't Tell Jokes*⁶

この3冊について、以下、少し説明します。

Super Fast, Out of Control!

この作品は *Marvin Redpost* というシリーズ⁷ 中の7冊目です。自分にはできそうもないことに、不本意にも直面させられていく主人公の気持の描き方が上手いと思いました。“It felt good to make his own decision.” (73ページ) とか、“Only one person cared whether or not Marvin Redpost rode his bike down Suicide Hill. That person was Marvin Redpost.” (79ページ) など、人生を語っている？ ような台詞もいくつかありました。

このシリーズは1冊が短く(80ページ程度)活字も大きいので、英語の苦手な人にも手にとりやすいと思いますし、「洋書にチャレンジする」足慣らし?にもよいと思います。

Small Steps

ルイス・サッカーと言うと、ニューベリー賞を受賞した *Holes*⁸ を思い浮かべる人が多いと思います。この本は、*Holes* の登場人物の一人 Armpit (「脇の下」という意味) というあだ名で呼ばれて